



中国がわかるシリーズ 10 漢帝国の盛世と武帝の時代(後)

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO 出口 治明

ところで、匈奴の専横を苦々しく思っていた武帝は、BC139年、張騫を、匈奴によって西方に追われた大月氏に派遣し、匈奴を挟み撃ちにしようと考えました。武帝が没するまで約50年近く打ち続くことになる対匈奴大戦争の始まりです。しかし、大月氏は、西方に安住し、匈奴に対する復讐心を失っていました。張騫は、目的を達することは出来ませんでした。13年目に帰国し、西域への道が開かれました。19世紀の地理学者、リヒトホーフエンが命名したシルクロードの誕生です(もっとも、太古からユーラシアの東西を結ぶ道は存在していました。張騫以降、国家がこの道を管理し始めたのです)。漢は、高祖以来、匈奴の属国的なスタンスを保ち、平和外交を旨として、目立った外征を行いませんでしたので、国力は回復し、国庫が豊かになっていました。

満を持した武帝は、衛皇后の弟、衛青や、甥、霍去病を将軍として、何度も匈奴を撃たせ、BC121年、終に匈奴の渾邪王は、漢に降りました。ここに、匈奴と漢の国際関係は、主従が完全に逆転したのです。武帝は、大宛(フェルガーナ)にも軍を送り、待望の汗血馬を得ました。しかし、度重なる大規模な外征は、国力を蝕み、財政を逼迫させましたので、武帝は、経済官僚、桑弘羊を抜擢して、BC119年には塩鉄専売制を始め、BC115年には、均輸法(税の物納に商人を介在させず中間マージンを節約)により、歳入増を図りました。また、武帝は、BC118年に、貨幣改革を行い、これまでの半両銭に代えて五銖銭を発行し、租税(基本は人頭税)もすべて五銖銭で収納するシステムを導入したので、貨幣経済は全国に行渡りました(五銖銭は、安定通貨として、隋の時代まで通用することになります)。

匈奴を撃った武帝は、BC113年、初めて巡行に出発、BC111年には、南越を滅ぼし、ベトナム北部から中部にかけて3郡を置きました。南越に拠っていた夜郎(貴州の地方政権、夜郎自大、という言葉で有名です)なども漢に服属し、ベトナム中北部から雲南までを領有した漢は、東南アジア貿易に直接乗り出すことになりました。

当時は国際通貨である金が豊富に産出し、特産物である絹織物がありましたので、対外交易は容易でした。BC108年には、衛氏朝鮮(伝説の箕氏朝鮮の次の王朝。BC194年、燕人、衛満が平壤近辺に建国)を滅ぼし、楽浪郡など4郡を設置しました(その後、楽浪郡は、400年余り継続し



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ます)。武帝の時代、特にその前半は、中国の古代帝国の極盛期と言ってよいでしょう。武帝は始皇帝を意識し、常に張り合おうとしていたように思われます(秦皇漢武という言葉もあります。もっとも、武帝時代の歴史の改竄にも拘わらず、リーダーとしての資質は始皇帝が傑出していたことは明らかです)。BC110年に、泰山で封禪を行った武帝は(後には、光武帝、唐の高宗、玄宗、宋の真宗等も封禪を行いました)、始皇帝が作った渤海沿岸の離宮を訪れました。遥かな東海を眺めながら、武帝もまた、不老不死の幻想に囚われ始めていたのです。BC104年、武帝は10月から始まる秦暦を改め、正月から始まる太初暦(夏の暦。太陰太陽暦)を採用しました。その頃、父、司馬談の遺志を継いだ司馬遷が、堆く積まれた竹簡を前にして、稀代の歴史書「史記」の執筆に心血を注いでいたのです。

晩年に入った武帝は李夫人に溺れて暗愚となり(傾城、傾国の美女という言葉が生まれました)、国運は徐々に下降線を辿ります。BC91年、巫蠱の乱が生じ、皇太子李戩が(無実の罪で)廃されました。BC88年、西域に敦煌郡が設置され、敦煌の歴史が始まりました。武帝の死後(BC87)は、8歳の昭帝を擁して、夭折した霍去病の弟、霍光が権力を握りましたが(霍光の大権から閔白という言葉が生まれたのです)、第9代の宣帝(民間に匿われていた李戩の嫡子。BC74~49)は、霍光の死後、霍氏一族を滅ぼし、匈奴を東西に分裂させるなど、漢帝国の中興を果しました。また、宣帝は、匈奴の脅威が去ったので、烏壘城(敦煌の西方、亀茲のやや東方)に初めて西域都護を置き(BC60年)、西域の本格経営に乗り出しました。しかし、宣帝の死後は、外戚の専横が続く中、(漢)王室は衰亡していきました。王政君が皇后に冊立されたのは、BC48年のことでした。この一族からやがて王莽が出ることとなります。BC33年、漢の後宮にいた王昭君が匈奴の呼韓邪単于の元に嫁いでいきました。漢と匈奴は、武帝や王莽の特殊な時期を除き、概ね、平和共存していたと考えられています(通婚も盛んでした)。